Hirzebruch 先生を偲んで

熊本大学大学院自然科学研究科
小林　　治

Hirzebruch 先生の追悼文を書くにあたって，私より相応しい方が大勢いらっしゃる事を重々承知の上，僭越ながら駄文を認めたい．先生の数学は，代数幾何学，トポロジー，数論と言われ，私とは分野を異にするが，符号数定理，Riemann–Roch–Hirzebruch 定理など，その後の指数定理に繋がる重要な仕事が有名で， 20 世紀の多様体の幾何学の発展において決定的な足跡を残した．私の数学からはこのように見える．年代的には私の父とほぼ同年であるが，父ではなく，ほとんど神に近い存在である．斯様な私ではあるが，しかしながら，先生から大いに教えを受けるところがあり，その思い出の糸口を見出すために記憶を手繰りたい．

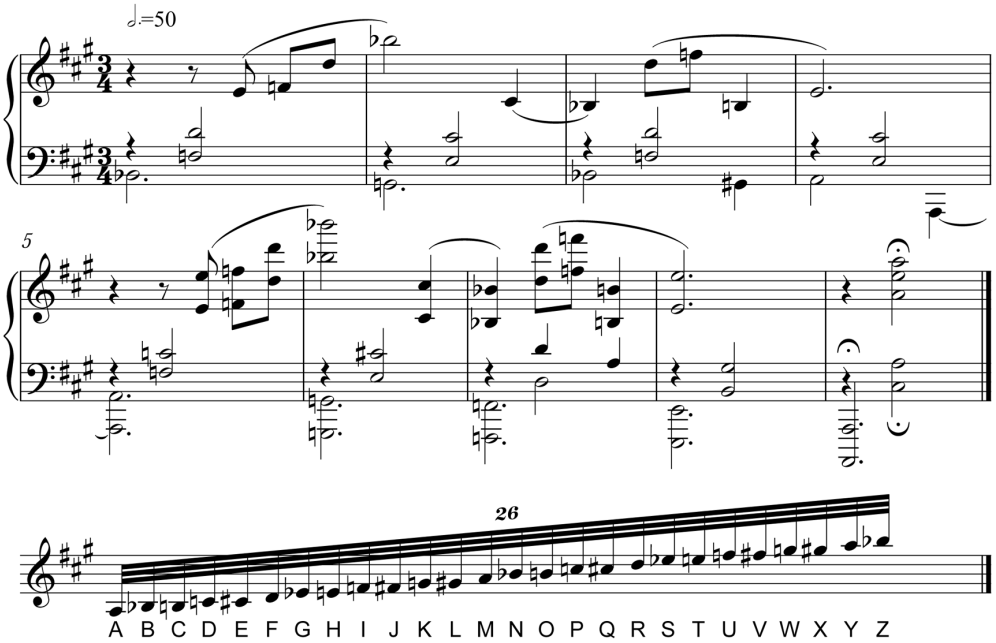
1985 年末に，ボンの Max-Planck 数学研究所が「共形幾何学」をテーマに微分幾何学関係の研究者を集めている事を知った．問い合わせたところ，年が明けて 1 月に応募用紙が送られて来て，すぐに書類を揃えて提出した．その返事が研究所長 Hirzebruch 先生からの 2 月 18 日付けの手紙で，「3 月 1 日」から研究所に来るようにと言う内容であった．この手紙には大変驚いた．受け取ったのは 2 月 28 日である．不可能な日程である．必要なビザすら取れない．結局，3 月 1 日は無理なので 4 月 1 日に変更して頂きたいと手紙を書き，慌ただしい 1 か月を相当な無理をして出国の手筈を整えるために過ごし，何とか 4 月 1 日にボンに到着した．研究所に着き，Hirzebruch 所長に挨拶に行ったが，その時に写真を撮られた事以外はほとんど何も覚えていない．しかし圧倒的な人間力（こんな言葉はあるのだろうか），そして厳しさの中にも無限の優しさを湛えた眼差しに心を打たれた事は強く印象に残っている．

その後，数カ月の間，共形幾何学に関する研究者の出入りが頻繁にあり，関係するセミナーも毎週開かれ，目まぐるしい日々が過ぎた．しかし「共形幾何学」のプロジェクトは期限付きで，夏の休暇時期に入ると，微分幾何学関係者のほとんどが研究所を去って行った．これで少しは自分の研究に専念できるとほっとした気持ちもあったが，事情はそれほどに甘くは無く，次の学期から，微分幾何学セミナーを主催して続けるようにと依頼された．これが大変な仕事であった．ドイツ語は話せないし英語も相当怪しい．こんな語学力で，まずは講演者を探さなくてはいけない—そのため当時研究所にいた日本人数学者には大変お世話になった．候補者が見つかったら会って話を聞く，話し込む．必要ならば講演謝金や旅費を援助する．その可否や程度を見積もるのも世話役の役目である．時に必要な書類を作成し，謝金や旅費の援助をする場合には，適切な額である事の理由が求められる．貧弱な内容の講演の際には，この講演者には謝金を払ってないだろうね，と注意される事もある．セミナーの進行係をして，講演の終わりに何か質問をする．この程度の仕事だろうと思っていたが，実際は相当に違っていた．結構大変である．このような仕事を海の物とも山の物ともつかない私の

ような若造に任せると言う事は一体どういう事なのだろうと思わない訳でもなかった．他に，これは当然であるが，幾何学関係の論文の査読を頼まれる事があり，また推薦状作成のお手伝いをさせてもらった事も幾度となくある．「X 氏はアメリカの大学に就職し，今，昇進のために推薦状を必要としている．大変好ましい人物である事は良く知っているが，研究業績について，どういう点を評価すべきか意見を聞かせてくれ」こんな調子である．つまり私のような人間に数学的信頼を置いてくれている．これは言葉に表せないほど大きな励みになった．

ボンに来て 1 年が過ぎようとし，去り難い気持ちも強く， もう 1 年滞在を延長してもらえないかと，Hirzebruch 先生に伝えたところ，審査の会議などを経て「よろしい．ただし条件として微分幾何学セミナーを続ける事」との返事を得た．うれしい．しかしセミナーの世話役を続けるのは . . . 重い. . . もしボンでセミナーの主催者をやらずに済んだらと思う事がある．多分，自分の研究により専念できたであろう．しかし，このセミナーの仕事は貴重な経験で，自分の研究を進める事以上に大切なものを得た気がする．これをうまく言い表すのは難しいが「数学は一部の天才や秀才達だけで成り立っているのではない．数学にも社会があり，それに属する人々がそれぞれに相応しい仕事をまっとうして学問の発展につながる」と言う風に言えなくもない．尤も Hirzebruch 先生がこのような考えを持っていたかどうかはまったく定かでない．

ボンに住んで 2 年目の冬，Hirzebruch 先生の還暦のお祝いがあった．そのために日本からも多くの数学者がやって来た．私も一緒にお祝いに参加したいと言う気持ちがあったが，なぜかその場に溶け込む事ができなかった．そこでささやかであるが，先生の誕生日に，以下のような五線譜の走り書きを先生の郵便受けに投げ込んだ．



この楽句の意味を解読された先生は翌日手紙を下さり　Über Ihren musikalischen Geburtstagsgruß habe ich mich ganz besonders gefreut ... とある．きちんと思いを受け止めてくれた．欣喜雀躍．

結局，微分幾何学セミナーは合わせて 40 回ほど開いた．その数学的内容は，私が個人的に求めていたものとは多少のずれがあり，この点で得るものが多かったとは言えない．しかし何よりも，この経験により Hirzebruch 先生から多くを学べた事に感謝している．